

More than you think

夜鐘

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本作品は「小説家になろう」で連載中の『シャングリラ・フロンティア〜クソゲーハンター、神ゲーに挑まんとす〜』の二次創作となります。

楽玲の自覚く付き合うまでをかけたらいいなと思いつつ、半分ぐらい諦めています。捏造多いです、すみません。

目次

時間差にて誘爆	1
走り出す	5
たどり着く	9
ずっと前から	13
狼少女は二度死ぬ	19
More than i think	24

時間差にて誘爆

「でね、この前さー、現場で一緒になったモデルさん……あつ男なんだけど。全然話が合わなくて休憩時間めちやくちや困った」

「瑠美がそうなるのは珍しいね」

「大抵の人と一時間ぐらいい話は途切れさせずに話せる自信があつたんだけどなー」

日曜日の午前八時、大凡一週間ぶりに顔を揃えた我が家族は、朝食を食べながら活動報告……もとい自分の趣味についての雑談で盛り上がっていた。母さんは最近飼育し出したなんとかとかいう蝶の体調が悪くて、気温管理に四苦八苦しているらしいし、父さんはそろそろ釣竿の買い替え時らしくカタログと睨めっこしている。俺は俺で、最近ゲームでちよつと『やらかして』オフゲーの釣りをしているはなしをやるわりとしたら、父さんの食いつきが凄くてびびった。あつ、いや、釣竿はいらないです。ゲーム！ゲームだから！マイ両親は、すぐ人を自分の趣味に巻き込もうとする……！

「合う合わないは仕方ないんじゃない？黙ってブラックリスト入れとけよ、マナーだぞ」

「おにーちゃんの人付き合いはそうかもだけど、仕事では苦手な人もブロックできないって知ってた？」

「へえ、仕事って面倒だね」

「うっわ、むかつく」

おにーちゃんもアルバイトしてみなよつて？ざーんねん。うちの高校はアルバイト禁止ですし、そもそも毎月いただける資金で十分首が回ってるからなー。大学になったら何かするかもだけど。

それにお前、数ヶ月前に後輩アルバイトの女の子にも同じ様な事言ってたけど、今、結局手作りクッキーとか貢がれてるじゃんか。

「はー、話す気がない人とひたすら無言で一緒にいるのは流石に憂鬱だよー」

「愚痴はそのぐらいにして。そういえば瑠美は期末テスト大丈夫なの

？」

「はあい……。テストはいつも通り……って私だけ？」

「楽郎はこの前、勉強しに行くって珍しく図書館まで行ってたもの」

「へえー！おにーちゃんがんばめっずらし。え、家で勉強が追いつかないぐらいやばいの？」

「やばくねーわ、テスト範囲内の理解と暗記はもう終わってますう！」

「ああ、レポート提出かい？大学みたいだねえ」

「高校になったら、テストだけじゃないんだ……」

「ちがうちがう。勉強会？みたいな感じ。めちやくちや頭良い友達に誘われたから」

父さんの言葉に瑠美が面倒だとばかりに顔を歪めた。いや、道徳作文は考えていたけどレポート提出はないから勘違いはとりあえず正しておく。瑠美が高校入ったらバレル嘘は未来の俺が困るから……。あれ？楽郎、勉強終わったらすぐゲームしたいから基本勉強は部屋でするって言ってなかった？」

「……あ……まあ、はい。偶々、ええ……ごちそうさまでした！」

「はい、お粗末様でした」

「あつー！おにーちゃん逃げた」

「戦略的撤退は戦術のひとつ！！」

なんか面倒な追求をされる予感がすると、俺の鍛え上げられた第六感がいつてんだよ！あつお母様、ニコニコしながら女の子かしらって言わないで、聞こえてるし、あつてるけどあつてないからあ！

玲さんはリアルな貴重な(廃)ゲーム仲間です。いや、たまにちよつとこう、俺も男の子だからちよつとそうかな？って期待……ではなく！予想することもあるにはあるが、玲さんの接触は尽くゲーム絡み！邪な感情を抱くのは廃人としてリスペクトしているレイ氏に失礼だ。カツンカツンと、ペンが液晶に当たる音が部屋に響くが……えつと、これなんだつけ、辞書辞書。はい。……あーだめだ全然頭に入ら

ん。今日のノルマをクリアしたら、久々にシャンフロにインするかと思っただけれど、もうちよつと頭冷やしてからにしよう。カップ麺食べたい。

「三分飯、三分飯くつと。」

「めつずらし、おにーちゃんが、お昼の時間にお昼しにきてる」

「お前こそ、この時間まで家にいるの珍しいじゃん」

「さすがにテスト期間中はバイト減らしてるの。平均点なら余裕だけど良い点数とつとくに越したことはないし」

「で、今日は」

「買い物行くけど、晩ご飯までには帰る」

「左様で」

割り箸とお湯を注いだカップ麺を持って、食べ終わったら今度こそゲームしよう。気分が乗らなければ、今日もシャンフロじゃなくても良いや。

「あ、そういうえば、今朝言ってた勉強会の相手って本当に彼女なの？」

「はっ……!!あっち、え？なに？かのじよ……？」

「え？言い方的にみんなで、って感じじゃなかったしい、お母さんが絶対女の子っていったから……じゃあ彼女かなって結論になったよ」「本人抜きで結論を出すんじゃない……いやいや、本当友達。たしかに女性だけど、あの彼女と俺は性別の垣根を超えた友達なんですわ」

鼻歌まじりで階段を上ろうとした時に朝回避したはずの爆弾が帰ってきた。学校のクラスメイトに誤解されるのとは訳が違う。きちんと誤解を解いておかないと、一度連れてこいだとかそういう話にまで発展してしまう……！なんせウチは趣味一家なのだ、嫁いでくる可能性がある人に対しては結婚後のギャップができるだけないよう、親族一同全員でうちの特異性について説明することになっている。うちの両親は特異な例でお互いの実家に挨拶に行った時の、趣味狂いについての注意喚起が、全く同じだったといういまでも親族酒盛りの鉄板ネタ……いや、いやいや、それは関係なくてだな。そもそも玲さんは彼女じゃないんだって。

「……えー？それマジで言ってるならお兄ちゃんないわー」

「なんなの、だから本当に」

瑠美はどうしてそういう思考になるのか分からないとでもいうようにため息を零した。あのねえ、とまるで出来の悪い子供に説教するようなテンションだ。

「少なくとも女子的には異性と二人で勉強会は割とハードル高いよ」

「え？まじで？」

「まじ。場所が図書館かどっちかの部屋になる時点で誘うの勇氣いるよね？」

「いやでも、部屋はともかく図書館は……」

「図書館ならあんまり喋れないでしょ？沈黙がキツくない人じゃないと無理じゃん。というかまず異性と二人で図書館で勉強は、世間一般でいう図書館デートに該当します」

「としゃかん、でーと」

『デート』という言葉でパツと出てきたのはJGEでの自分の発言である。あー、お互いその気がなくともデートみたいだよなー、迷惑じゃないかなと思つたのをぼんやりと覚えている。その問いに玲さんはなんと答えたのだったか。確か、『問題ない』ってバグりながら……？え？

「少なくとも、周りの全く縁のない他人に、お兄ちゃんとデートしてるって思われてもいいって思つて、二人でいるわけじゃん……ってあれ？お兄ちゃん？」

「……あたまが ずつうで すごくいたいので、カフェインきめて、ゲームをします」

「……………ふぁいとー」

……………あ、カップ麺の麺伸びきつてやがる。

ははは……………えー？

走り出す

瑠美の一般論を加味し、今までの自分の行動と玲さんの行動を吟味した結果、なるほど、一般論で言えば間違いなく瑠美の言っていることは的を射ていると思われる。しかし、しかしだ。相手は廃人ゲーマーのレイ氏とクソゲーマーの俺である。一般論が通用するのか。

少なくとも俺は瑠美に指摘されるまで、玲さんに好意を持たれているとは、露ほども思わなかった。神に誓ってもいい。玲さんのリアルのアバターが美少女だからこそその思考バグはあったが、その想像、否。妄想に現実味を帯びたことはなかった。今まで起こったイベントを並べて、初めてそうかもしれないと思ったぐらいだ。

いくら俺がクソゲーに人生の半分以上を捧げているとはいえ、ここまで露骨なフラグである。流石に普通なら気づく。それを尽く意識させないまま、無視してしまったのはなぜか？

それは、リアルバレしてから、付き合いこそ増えたが、玲さんからそういうアピールを受けた覚えが一切、ないからだ。

大抵の話題はシャンフロについてだし、次点で学校の話題である。二人で遊びに行こうと誘われたのはそれこそ件のJGEぐらいだし、それも岩巻さんからの融通があつての偶然……！勉強会については、本当に勉強会だった。例のあれについての雑談もしたりしたが、基本、真面目に机に向かっていたのだ。

……！
そう、全ては状況証拠を突きつけられたことに焦った俺の勘違い

「で、話が終わっていれば平和だったんだよなあ」

はあ、と一際大きなため息が、揺れる水面に落ちた。その結論が出た今尚、頭を抱えているのは、可能性を見出してしまったからこそその葛藤だ。正直に言うと、一度可能性を見出してしまったからこそ、事実はどうであれ純粋なゲーム仲間として見れなくなっている。

（いやだって、玲さんに一秒でも恋愛感情向けられてるかも？って

思ったら無理ですわ。ワンフレーム惚けたらコンボ決められてタコ殴りKOされるに決まってるだろ……)

玲さんに非はない、分かっている。くっ、POW対抗で自動成功する程度のステータスが俺に備わってさえいれば……！魅了状態のキャラクターってこんな気持ちになつてたのか、なるほどこれは辛い。混乱して後出しの絶妙に可愛くないヒロインの為に世界滅ぼす気持ちも分か……いやあれは別に魅了にかかっていた訳じゃねーしな。

「とりあえず、チャートだ……綿密なチャートの組み上げこそ勝利につながる。とりあえず明日の朝は一時間早く出るか……」

通学路が近いという事実と、交流が出来たことによつて、最近は通学路で玲さんに声かけられることが多いのだ。勿論、友人の背中を見つければ声をかけるのは自明だが、明日に限ってはそれさえも避けた方が無難だろう。

「あ、いけね。晩飯」

強制ログアウトの足音が聞こえて来るようだ。いや、まあこのゲームで強制ログアウトさせられても痛くはないんだけど。身についた習慣が焦らせてくる。もう数えるのもやめてしまったブルーギルを川に戻して、慌ててログアウトした。

ーリアル恋愛ゲームとは。

即ち選択肢の連続であり、その癖、残念ながらセーブもロードもできないので常に一発勝負、その上、頼れる攻略チャートもないゲームである。

「……控えめに言つてクソゲーでは？」

「なに？陽務、新しいゲーム買ったの？」

「んにや、HR終わつたらすぐに、一秒のロスなく、ダツシユで買いに

行く」

「……そんな売り切れそうな人気タイトル今日発売されてたっけ？」

高橋が首を捻っているが、別に売り切れを懸念して走る訳ではないんですよ。クソゲーを求める俺の中の”passion”が俺に走れと囁くのさ。……何処かの雑菌福耳ピアスのポエム病が移ったかな。

「……何故こつちをみる」

「いや、ポエムミームも存在するのかなって」

「ポエムミームって何!?!」

雑ピがなんで急に巻き込んできたんだ、という目でこつちを見ているが、あ？高橋が雑ピを揶揄いたそうな目でこちらを見ている。仲間になりますか？

「……ポエムミームとは!!!」

まるで画面の向こうに語りかけるように口火を切ると、キラキラと目を輝かせた男子数名がガタツと音を立てて立ち上がった。

「知らぬ間に、人々の言葉を介して感染し！」

「感染した者の脳内を犯して、思考バクとしてポエムを撒き散らす！」

「……え、俺？俺が締めるの?……お、恐ろしい病である!!!」

「普通だな」

「暁ハート先生ならもつといいキャッチコピーを考え出せるはずだぜ……!」

「精進しろよ。つーことで席につけえ、HR始めるぞ」

いつの間にか教室に来ていた担任に、ポン、と肩を叩かれて、激励された雑ピくんはセンサーまでえ！と声を上げながら渋々と席に着いた。

さて、先生からの連絡事項を頭に入れながら、頭の中で最短通路を叩き出す。右手で鞆を掴んで混みにくい前のドアから教室を出て、東北階段から、下駄箱へ直行。後は乱数イベントが起こらなければ完璧だ。

「よし、今日も寄り道は程々にして帰れよー」

「起立、礼」

「お疲れ様でしたあ!!!」

かんっぺきだ！完璧なスタートダッシュだ！

教室の喧騒さえ背中に置いて、先生に見咎められない程度に早歩きで下駄箱へと辿り着き、外に出たら走り出すうううう。唸れ俺の脚力うううううう！

たどり着く

学校帰りに直接駆け込んだロックロールは相変わらず閑散としていた。まあ、平日の夕方だということもあるかもしれないが。

「いきなり飛び込んで来て誰かと思ったら、楽郎くんじゃない」

「はー、ちわーす……。ちよつと本気で走ってきまして」

「取り置きなかったわよね?」

学校からロックロールまでのRTAが一番いい数字が出せた気がする。因みに二番目は傘持って無くて、雨に打たれながら全速力で走った時だよ。多分。

あー、季節は冬だというのに、夏かと言うぐらいに暑い。ガンガンに効いてる暖房が暑い。パタパタと学ランの裾で風を送っていると岩巻さんが呆れながら、暖房の温度を下げてくれた。

「というか、うちは人気タイトルの新作狙いでもなきや、在庫切れはないわよ」

「走らずにはいられない精神状態だっただけなんで、おかまいなく……」

岩巻さんは青春ねえと軽く笑った。青春と全力疾走の因果関係を問おうと思つた所で、某リアルラック少女の事を思い出してやめた。俺も秋津茜が理由もなく全力で走つてるところ見たらそう思う。

「今日はなにかお求め?ワゴン見ていく?」

「や、今日はそういうのではなく。あー、そういうのもいいんだけど」

「どつちよ」

「ギャルゲーでシナリオが良いのありません?ゲーム性度外視で」

「あら、ジャンル指定は珍しい」

そう言つて、バックヤードへ向かうと、一本のソフトを持って帰つてきた。ファンタジー、いや学園ものかな。キャラの衣装は制服っぽい。攻略キャラは5人……隠しキャラ入れて6人か?

「そのオーダーならコレは?シナリオはいいわよ」

「シナリオは」

「まあお察しの通りシステム面が駄目。製作者がシナリオライターさんのファンでね……。最初に選んだ選択肢でゲームを進めて欲しい……っていうエゴが形を持つちゃって。キャラルートに入ると、これから先は中断セーブ以外のセーブロードは出来なくなりますっていう注意テロップが出るわ」

「……うわあ」

スチルフルコン勢と効率重視勢が泣き出しそうなシステムだな。それでも尚、俺が聞いたことのないタイトルってことは、良ゲーの内に入っているんだろう。相当シナリオの出来がいいらしい。製造年を見ると、半年前……？

「バッドエンドも結構細分化されててねえ。ハッピーエンドは各キャラに友情エンド、恋愛エンドが用意されてる。パラメータ調整が厳しいらしいからコンプするなら根気が必要って奴ね」

「あれ、でもこう言うのって攻略サイトは？半年前だし充実してるんじゃない……」

「公式がチャートのネット公開は禁止してるのよ。裏で攻略チャート載せてる同人誌（非販売）の郵送交換ならあるけど」

「譲：キャラ√友情 求：キャラ√恋愛……？」

「恋愛ルートの方がレート高いから、見つかるかどうかは時の運ね」

このネット社会で現品での物々交換……。なんてアナログな。しかも中身の偽造も完璧らしく、知らない人が見ても完成度の高いただのオリジナル小説としか読めないらし……。あ、思い出した。これSNSで、プレイした人全て薄くて厚い本を出すようになるゲームでバスってなかったっけか。……あれ、ネタじゃなかったのか。

それにしても、偶然とはいえ、求めているものに近いものが出てきたんじゃないだろうか。特にセーブロードが『出来ない』ところなんて、最高だ。日々クソゲーで徳を積んでる成果かあ？

「じゃあ、コレください」

「はい。8540円」

「あざーす」

「それにしてもやり込みもののオフゲーなんて、暫く籠る気？」

「シャンフロには近々INする予定なんすけど。……の前にやっぱり腹括らないと……」

岩巻さんが不思議そうに首を傾げる。近々玲さんとパーティー組む事になるだろうし、それまでには『混ざり込んだ不純物』をなんとかしておかないとな。

「なあに？ギヤルゲーの手腕が必要なイベントでもあったのかしら」

「いや、ゲームの話じゃなくてですね」

「……ゲームの話じゃない？」

なんだ、悪寒が。

蛇に睨まれた蛙になった気分だ。今まで温和に話していた奴が、自分を食べる可能性がある事に思い至ったようなこの感覚。これはまズい。選択肢を間違えれば、多分やばい。ジリジリとどちらが口を開くかという嫌な間が落ちた。

「あの一、こんにちは。あーやっぱり、楽ろ……」

「によっお!!!」

「ぴゃ……!!!」

「あーら、玲ちゃん。よく来たわね！ほーんと、良いところに来てくれたわね」

「え？……え？」

岩巻さんとの攻防に必死になっていた俺は、背後から近づいてくる怪しくもなんともない玲さんの気配に気づかなかった！この動揺が岩巻さんにばれれば、俺の身にも危険が及ぶ……ええい、乱数の女神が笑っている声がしやがる……！まてまて。現実逃避をしている場合じゃないから！……というか、なんだ。玲さんってこんなに可愛かつ……。

ーゴンっ！

「ヤア、レイサン、キグウダネ」

「今すぐく、鈍い音がしましたよ!?大丈夫ですか!?!」

「ダイジョーブ、ダイジョーブ。レイサンハ、カイモノ？」

「あつ……私は楽郎くんが出ていくところを……偶然！偶然ですよ？偶然、見たので此処かと思つて寄つてみたんです」

「ソウナンダ。グウゼンツテ、コワイネ」

やっぱり乱数のせいじゃねえか！くそ野郎！廊下でバツタリを避けるための行動がフラグになっていたとは。正気に戻るためには仕方なかったとはいえ、打ち付けたデコが痛え。古今東西、動揺は物理で治ると相場が決まつてるから仕方がないとは言え、思いつきりやりすぎた。つーか、本当にどうする？どう回避する？正面突破？ーいや、これ以上、下手な拳動を見咎められればそれこそ、死……！

「……玲さん」

「はい？」

がしり、と玲さんの肩を掴む。ここはもう、玲さんに全てを任せて敵前逃亡しか道はないんだ……！

「すぐにこの気持ちに蹴りをつけてくるから、クリスマスまで（シャンフロで一緒に遊ぶのは）待っててくれ!!」

「く、ぐりしゅつつつ!!」

「ゲームもらつていきます!! あざーしたっ!」

ゲームソフトの入った袋を引っ掴んで、戦略的離脱だ。離脱。

……昨日から逃げてばかりじゃん、俺。

ずっと前から

『More than you think』

——直訳すると『あなたが思うよりも多く』だが、より日本語らしい言い回しに直すと『あなたが思うよりも』となる。

*

久しぶりに便秘こと、ベルセルク・オンライン・パッションにインしたのは、純粹に体を動かしたかったのが5割、ギャルゲーに詰まったのが4割。残り1割は最近、便秘にまたインし始めたというカツツオにあわよくば会えないかと目論んだ為だ。最近インしていると聞いていたから、会える可能性が高いと睨み、特に約束もせずにゲームを開始した。

——ら、である。いたのは確かにいた。元気に目の前で対戦を行なっている。それはいい。いいのだが、対戦相手の見覚えのあるガチムチの髭面は、秋津茜では？

「お、サンラクじゃん！ちーすつ」

「久しぶりだな！引退するつってたのに、お前時々来てるよなー？」

「一度クソバグゲーに囚われた者はもう普通のゲームでは満足できない体になっちゃうんだよ」

「まてまてまて、一気に話すな！てか視界の圧が強いんだよ！」

右から縦にデカイガチムチ、横に広いガチムチ、髭面のガチムチである。画面の圧が半端じゃねえ。

過疎ゲーだけに今でもインしているような酔狂なやつはみんな顔見知りだし、それこそ旧友にでもあった気安さで声をかけてくる。

「対戦まち？」

「そ。カツツオの奴と対戦しようかと思っただけど、どうもおモテになっっているようだから、順番待ち」

絡んできたガチムチトリオにそう言いながら、視線をカツツオたちに移した。

「ああ、ドラゴンフライと、か。最近よく対戦してんだよな。今何ラウンド目？」

「確か、通算でまだ一ラウンドも取れてないんだよなあ」

「後輩に容赦ねーよ。モドルカツツオのやつ」

そんな感じで、秋津茜とカツツオの対戦を他の観戦者と一緒に見て……あ？カツツオ、見た目ガチムチとはいえ、女の子（中身）相手に思いつきり顔面いったな!!は……？HPゲージ減つてない？へー、なるほど。特殊コマンド踏むと当たり判定が顔面だけ無くなるのか……。ゲージ削れないからって顔面から突っ込むドラゴンフライまじでつえー。アバターも女の子なら、イアイフィスト案件だったな。

観戦者と賑やかしをしているうちに対戦が終わってしまったらしい。ううん、カツツオの奴、後になればなるほど厄介だからなあ。秋津茜はリアルラックが有効な内に、ラウンド取れていればワンチャンあつたんじゃないか？

「あれ、サンラクさん！」

「おーす、見てたぞ残念だったな」

「いえー！また精進するので大丈夫です！」

「カツツオが女の子の顔面を躊躇なく殴れる奴じゃなかったら、勝ってたのにな」

「言い方に語弊!!!」

カツツオが心外だとしても言うように頭を抱えた。ゲームキャラを殴っているのであって、年下の女の子の顔面を躊躇いなく殴った訳ではない、と必死に弁解しているカツツオだが、秋津茜の「勝つためなら女の子（のキャラ）だって、躊躇なく殴れる所凄いですー！」という一言で撃沈していた。悪意がないって怖い。

「所で、ペンシルゴンから連絡取れないって聞いてるけど、いつまで籠る気？」

折角だからと、秋津茜ともカツツオとも対戦をこなした後（秋津茜には勝ったが、カツツオには接った末に負けた、つぎはリベンジキメるので、首を洗って待つておけ）、カツツオから問われたのがこれであ

る。ちなみに、秋津茜は、ガチムチのおっさんと特訓だといって対戦中だ。

実のところ、シャンフロには（ラビッツに籠り気味だが）そこそこにインしている。ただ、クランメンバーとして動くには、まだ障害を取り除けていない……いや、より正確に言えば。——『障害』を取り除くかどうかを悩んでいる、というのが正しい。

「今やってる、オフゲーにクリアの目処がたったら戻るつもりだったんだけど」

そうだ、当初の予定ではそうだったのだ。ギャルゲーで正しい恋愛観をインストールして、玲さんから恋愛感情を持たれているかもしれないという妄想も、俺が玲さんにそういう感情を抱いているのではないかという戸惑いも、全て勘違いだったのだと、笑い飛ばしてしまいたかった。笑い飛ばして、いつも通りにゲームに熱中できる自分を取り戻すんだとそう思っていたはずなのに。

「歯切れ悪いね」

「まあ、ちよいと詰んだ」

「へえ、サンラクが珍しい。何やってんの？」

『More than you think』って言うギャルゲー」

「シナリオは名作のやつじゃん」

チームのやつがやって、システムにキレてたなあ、とカツツオがぼやく。確かにセーブロードが出来ないどころか、既読スキップがないとは思わなんだよ。……かなり細かく会話差分があるから、既読スキップ機能があっても活用できたかはわからないけれど。

「恋愛ルートに入れないんだよなあ」

「へえ、誰のルート？」

「白^{くしやうく}メインヒロイン」

「ああ、優等生で名家のお嬢様な正統派ヒロインちゃんね」

カツツオが、彼女が一番シナリオ分岐多いらしいねと、相槌を打った。

そう、このメインヒロインが曲者だったのだ。旧家のお嬢様らしい

彼女は、クラスで高嶺の花として見られており、能力も高く、しかしいつも穏やかで誰に対しても口調が丁寧だ。始めた時からなんとなく既視感があった。それがストーリーが進むごとにハッキリと形を持ってしまったのも詰んだ原因の一つかもしれない。

(……玲さんにちよつと似てんだよなあ)

別段キャラの造形が似ている訳ではない。ゲーム廃人というわけでもなく、そういう意味では全然違うのだが、ふとした瞬間、似てるな、と感じる。まあ、確かに玲さん自身、どこの二次元から飛び出してきたというレベルのスペック持ちだから、おかしくはない。ないのだけれど。

「正直、結構時間かかっているからさ。一旦攻略を保留にして、シヤンプ口に戻るか悩んでる」

そもそも時間がかかることが前提のゲームなのだ。シヤンプ口にインしながら、ダラダラと攻略してもいい気がする。言い訳は十分たつはずなのに、カツツオは訝しんだ顔を隠さずに、ズバリと核心をついた。

「なに、もしかしてサンラクさあ。それ、クリアしたくないの?」

「……」

凶星だった。それをクリアする事で何か気が付きたくない事に、気づいてしまう。そんな予感がしたから。色々理由をつけて、諦める道を探していたのかもしれない。カツツオは、数拍黙ったあと、いいけどね。と少しだけ笑う。そして、タイミングよく対戦から戻ってきた秋津茜を手招きした。ーああ、くそ。バレてやがる。俺がクリアを躊躇ってしまっている事。その一方で、誰かに背中を押して欲しいと思っている事。ただ、怖気ついているのか、と煽ってくれるだけでも良かったのに。『それ』を言うのに最も適した人物がここにいるのだ。

「あれ?どうしたんですか」

「俺じゃなくてサンラク」

「サンラクさん……?」

「ドラゴンフライ……秋津茜に、相談がある」

「はい！なんですか？　ちゃんと答えられるか分からないですが、一緒に考えますよ！」

唐突な俺の言葉に、躊躇う事なく、笑顔でそう返した秋津茜に、思わず苦笑が漏れた。

「実はクリアするか……いや。……『始めるかどうか』悩んでるゲームがある。それ、セーブもロードもできない上に、ハッピーエンドが用意されてるかも分からないゲームなんだけど、どう思う？」

「えっと、どう思うっていうのは？」

「やった方が良いと思うかって事」

「ああ！なら絶対、やった方がいいと思います！　だって、それをサンラクさんはやってみたって思ったんですよね？」

秋津茜は、俺の言葉を聞くなり何の迷いも見せずにそう言っただけで笑った。単純明快。チャレンジしてみたいなら、やってみれば良い。

カツオがそれを聴いて、ハッピーエンドは用意されてるだろう、ギャルゲーなんだから。とおかしな妄言を聞いたような顔をして言っただけには、笑ってしまった。

「やってみようから、やってみる。単純だな」

「そもそも、鉄砲玉が飛び出して、戻ってこれるわけないんだよなあ」

「あ？　ジャムだったかもだろ」

「自傷ダメージで死ぬようなタマかよ」

「あ、今鉄砲玉と掛けました？」

「……」

「やーい！　やーい！　解説されてやんのー！」

「煽るねえ……まあ、らしくない事で悩んでるよりは、いいんじゃない？」

ゲームを投げ出すより、よっぽど『らしい』よ、とニヤニヤと含み笑いをしているカツオ……の背中に、我慢できずに回し蹴りを入れる。いや、痛に障る顔をしていた、カツオが悪いでしょ。対戦中ではない戦闘行為はノーダメージだから、平気な顔をして立っているのだが。

「じゃ、やる気がある内に再チャレンジしてくるわ」

「はいはい。ーあ、要らないかもだけど、メインヒロインの恋愛エピソード、『タイトル回収』が鍵らしいよ」

「至れり尽くせりかよ、まあ、上手くいったら、弄られてやるよ」

「頑張ってくださいね！」

「おー、サンキュー。ドラゴンフライも頑張れ」

「はいー！」

ーMore than you think、和訳すると、あなたが思うよりも。『あなた』はおそらく主人公の事だ。主人公はゲーム冒頭では白が幼馴染である事を知らない。ルートに入るとその辺りはプレイヤーは、すぐ察せられるようになっていくが、主人公は最後の最後まで白が昔から自分を想ってくれているに気づかない。多分これが純粹な意味。そして、もう一つ。カツツオは、タイトル回収が鍵になっていると言っていた。主人公とは、即ちプレイヤーの事である。つまり、プレイヤーが『想う』よりも、『ずっと前から』ルートを決める

狼少女は二度死ぬ

『ずっと、ずっと。伝えたいと思ってたんです』

目の前で晴れやかな表情で笑顔を見せた彼女は、風に攫われそうになった長い黒髪を手で押さえつけた。桜の花弁がひらひらと視界を遮り、そして地面に降り積もっていく。それはさながら溶けない雪のよう。

『あの日、あなたが冗談だったとしても、好きだと伝えてくれて、すごく、うれしかった……!』

白は、その白い肌を紅頬させて、満面の笑みで微笑んだ。

「あら、久しぶり」

「こんにちは。相変わらず暇そうで何よりです」

「聞き捨てならないわね」

今日は大盛況よ。楽郎くん二人目のお客様ですから。と芝居がかった仕草で肩を竦め、カラカラと笑った岩卷さんにはんまりと口角を上げた。ロックロールを訪れたのはあれ以来と言うこともあって、開口一番、揶揄される可能性を捨てきれなかったが、流石に挨拶ぐらいはさせてもらえるようだ。

前回のアレはちよつと自分でもどうかと思う動揺っぷりだった。冷静に考えなくても岩卷さんには俺の行動のあれこれは透けて見えているに違いない。

「クリアしましたよ」

「……え? ああ! ギャルゲー。え? 全クリ?」

「それは流石に。メインヒロインだけですわー。あとはダラダラクリアしようかと」

「ふーん、で、どうだった?」

「まさか、恋愛ルートの特ウルーエンドのフラグが共通ルートにあるとは思いませんでした」

気付いてしまえばそれ程難しくもなんともない話だった。いや、キャラクター完全分岐型のゲームでルート外に恋愛ルートのフラグがあるのはちよつと反則臭いな、とは思うのだが。

兎も角。態々これをやった意味があったのか、と言われると当初の予定からはかなり逸れてしまったため、意味を問われると『ある』とは言い難い。ただ、紆余曲折した上でも結論が出たのだから、まったく意味がないとも言えないだろう。

「で？今日はその報告？」

「あー、そつちはついで、で。まあ、なんというか。背中を押されたので、退路も断ちにきたんですよね」

「退路？」

「ちよつと玲さんに告白しようと思って」

岩卷さんはぽかん、と間の抜けた顔をした後、目を見開いて、え、と驚きの声を上げた。その表情はまさに……晴天の霹靂？……鳩に豆鉄砲？……やめよう。なんだか虚しくなったわ。うん。わかる。俺も俺が言いそうにない台詞だと思っただけど、露骨に聞き間違いか？という顔をされると思うところがあるわけでございます。

「おつどろいた。君が？」

変に弄られない所に本気の驚きを感じる。いや、躊躇いはギャルゲーに置いてきた！ギャルゲーを置いて学んだことは受け身になっただけで良いことは何もないぞということ……！思い返せば、ピザ留学でもそうだった。主人公が積極的に動かなければ、ヒロイン達はピザ留学してしまうのだ。もちろんバッドコミュニケーションでも、ピザ留学なのだけど、三分の一で当たり選択肢があるのだから、選択肢にぶつかつた方がいいに決まっている。

「とりあえず当たって砕けたら、その時に考えようかと」

「この……とりあえず死んでみようでぶつかれる感じ、『誰かさん』に見習わせたいわね」

「誰かさん？」

「今私が推している、恋愛下手なヒロインちゃんの話。気にしないで」
乙女ゲームのヒロインが恋愛下手だと乙女ゲームにならないのでは？いや、そういう設定なんだろうけど。このままだといつまでも駄弁ってしまいそうだが、既に自分で退路は絶つてある。時計を見るともうすぐ17時という所で……うーん、そろそろかな？

「あ、玲さん」

「は!?!今から!?!」

「あの……お待たせして……?」

ロックロールの出入り口に目をやっていた俺が玲さんが来たことにいち早く気付き、声をかけ、察しの良い岩卷さんが素っ頓狂な声をあげ、家を出る時に、ロックロールにきてもらえるようお願いした玲さんが困惑の声を上げた。外には黒塗りの車が止まっており、どうやら送ってもらったようだった。

「急に呼び出してごめん」

「いえ、ぜ、全然まったく！大丈夫です。問題ないです！はい！」

そのまま一番いい装備を頼みそうな勢いだ。いや、そうではなく。ダメだな、すぐに話を脱線させてしまうのはまごう事なく悪癖だ。夕方とはいえ、この季節の夜は早い。暗くなり始めてから呼び出すのは若干、どうかな？とは思ったのだけれど、家の人に咎められなかったのならよかった。

「まって、玲ちゃん。車で来たわよね」

「へ?ひゃい。車で」

「もちろん帰りも送ってもらおう予定よね?」

「あ……いえ、帰りは、その……よ、よるところがあるので！ゆっくり歩いて帰ろうかと」

「ーん?目があつた?」

何うように視線を彷徨わせたように見えた玲さんと一瞬目が合ったような気がしたが、直ぐに視線は逸らされてしまった。

岩卷さんは、その様子を確認した後、家に戻ろうとしているのであろう車の運転手を手を上げて呼び止め、出入り口の方へと向かった。どうやら、玲さんを送迎してきた運転手に何か声を掛けにいったよう

「ただ、何かあったのかな。」

「どうしたんでしょう……?」

それを不思議そうに眺めている玲さんをみて、天啓が降りた。きつと岩巻さんが気を利かせてくれたに違いない。流石は乙女ゲームの歴戦の猛者ヘビーユーザー。気の利かせ方がスマートだ。若干不自然な流れだが、二人にしてくれたということだろう。背中を押され、退路を断ち、御膳立てされて、ここで逃げれば男が廃る！南無三！

「玲さん！」

「なんです……」

「付き合って下さい」

「か……う……んひやつ……?!??」

食い気味だった！しまった！と思う間もなく勢い任せで、言い切つてしまう。案の定言葉を詰まらせた玲さんが、顔を真っ赤に火照らせて、言葉を詰まらせ……詰まらせて……

ーバグっている。

あれ?……困った。いつも通りの反応だ。シヤンフロに誘った時とまったく同じ反応なのである。え、あー、もしかして伝わらなかったか?確かに、これだけ聞くとゲームの素材集めとか集会とかレベリングの事だと誤解するかもしれない。ちよつと焦りすぎて言葉不足だったか?

「ええつと、玲さん違うんだ」

「あ……あ、ひやい、勘違いしてないです!つまり、アレで、アレですね!」

ロード中の玲さんの誤解を解こうと、口を開くと、玲さんはやはりというか、いつものゲームについてのお誘いだ勘違いをしているらしい。ちよつと心が折れそう。誰だよ!玲さんが俺に好意を持っているのかもと言ったの!……クラスメイトと瑠美か。まあ俺は元より、期待なんて……まあそんなにはしていなかったけど。……仕方ないだろ!周りがそうだそうだというから、多少はそうかも?と思つて

も！現実はこちらなんだから、笑って許せ！

SSRの美少女が好意を寄せてくるなんてギャルゲーよりも都合主義だ。ギャルゲーの主人公ですら努力して相手を掴み取るのに、現実のしがえないクソゲーマーが何もせずに掴み取れるわけがない。ーそう、伝わらなかつたならば、伝わるように言えば良いだけだ。何事もトライ&エラー。失敗なくして成功はないのだから。

「まあ、レベリングも是非付き合って欲しいけど、今回はそうじゃなくて」

「……ふへ？」

これも本当。そもそもゲームで繋がった仲だし。上手くいこうが、いかなかろうが、一緒にゲームができる関係でいたいと思う。

「俺は、玲さんの事が好きだから、恋愛的な意味で付き合って欲しい」
「……」

よっし！言った！言い切ったぞ！！ここまで言えば、流石に勘違いはないだろ！若干勇みすぎて芝居がかつている気もするけど、言い切った。さあ、玲さんはどう出るか……。

振られるにしても、クランも一緒なわけだし、今後のゲーム活動に支障がでないようにだけは気を付けたい。恋愛沙汰でギスるのは……どう頑張ってもギルティだよなあ。やべ、不安になってきた。早まったか？もつと時を待つべき……。

「玲さん？」

「……」

ー反応がない。ただの屍のようだ……？バグっているにしても、流石にこの沈黙はおかしい、長すぎる。黙りこくった玲さんの顔を覗き込む。

「ふしゅ……」

「へ？……は？え？玲さん!？」

空気の抜けた風船のような音を出して膝をついた玲さんを慌てて支える。え、もしかしてこれは、気を失っている、よな？え？救急車？110ば……それは警察だ。じゃなくて。は？なんで!？」

More than i think

かつこん、と障子の外で鹿威しが鳴るのがやけに近く聞こえた。客間だという一室には畳が敷き詰められており、イグサの香りが何処か懐かしさを思い起こさせる。そんな日本人心を和らげてくれる空間のはずなのだが、今の自分にとっては緊張感を増す要因にしかならなかった。というのも。

(う、動けねえ……)

足の下には綿がしっかりと詰まったフカフカの座布団。目の前には高級そうな布団が1組。その上には、つい最近想い人だと認識した同級生が寝かされていた。

ーそう、紆余曲折があり、なぜか俺は風雲斎賀城の一室にお邪魔している。

……いや、なんでだ。マジでなんでだろう。目の前には、ついにバグるだけではなく、強制シャットダウンしてしまった玲さんが寝かされていた。玲さん、どんどん挙動がゲームキャラクターっぽくなっていくな……。と遠い目で現実逃避を行いつつ、どうしてこうなった、と今現在に至るまでの経緯を思い返す。

(玲さんに告白した、までは良かったんだよ……)

そこからの流れは何処のジェットコースターだ？と言うほど急降下、急上昇、超スピードだった。まず告白を聞いたことにより、岩卷さん曰く玲さんは『処理落ち』してしまつたらしい。そんなに俺クソゲーマーの告白は脳に負荷の掛かる代物だった……。？玲さんの脳のスペックが低い訳が無いので、俺の告白が相当重かった(意外だった)みたいだ。そして、『何故か』この展開を予想していた岩卷さんによって引き止められていた送迎車に玲さんを引き渡したついでに俺も車の中に押し込められ、あれよあれよと言う間に客間に通された。

(だから、ゲームの中では格式高い日本屋敷を土足で探索できようとも、リアルだと難易度がクソ高いんだって!!あれ?なんか前も同じ事思わなかったっけ?)

サブプリミナル効果のように脳内で鯉の『さわやかな えがお』が通り過ぎて行ったので、脳天にハンドガンの弾をぶち込んでやって、現実逃避から華麗にアイルビーバック。はっ！しまった……もう暫く現実逃避してたかった……！

(よし、選択肢は三つだ。古来からこの手の状況の選択肢は三つだと決まっているから、取れる選択肢は三つあるはずだ。証明完了。何の矛盾もない！)

どこぞのギャルゲー主人公の気持ちをも、これほど真に迫って知る事になるとは思わなかった。さて選択肢だが。

屋敷の人に言付けて家に帰る。

玲さんを何とかして起こしてから、家に帰る。

そつとしておこう……。



システム様は、様式美を選択肢に入れるのをやめようね！実質二択じゃん。とりあえず俺はこの状態から脱却して、お家に帰りたいたいだけなんだ。いや、本当に。現実的なのは玲さんのご家族に言付けることだが、その場合俺は告白の返事を先延ばしにされることになり、無駄に悶々として過ごすことになる。何より明日ばったり、通学路や学校であつたりしたら、かなり気まずい。ここ一年で、玲さんとの遭遇率がやけに高くなっている気さえするので(現実の運営が特定エンカウント率を修正したんじゃないかと疑うぐらいには多い)杞憂とは言えないだろう。三択問題(実質二択)で悩んでいるとタイムリミットがきてしまったらしい。ばすん！と勢いよく音を立てて、左隣にある襖が開いたのだ。

「玲！情けないですよ！いい加減起きてはどうですか！」

「ふへ？」

ぱしんぱしん！と良い音を鳴らして玲さんの頬を遠慮なくはたいた一番上のお姉さんは、そのおっとりとした口調とは裏腹に、玲さんに対して容赦がなかった。なるほどお、斎賀さんのお家の人は、みんなシンプルに物理が強いんだなあ……と感嘆してしまった。

「え、えーと?」

「玲、千載一遇のチャンスこそ、のがしてはなりません。寝ている場合ではないのです。姉は、応援しています。このチャンスしつかりモノにするのですよ」

鋭い痛みで目を覚ました玲さんは可哀想なほど、混乱したまま、目の前のお姉さんの勢いに押されて領いた。多分本人も、何に領いたのかわかっていないのではないだろうか？ちなみに俺もよくわかっていない。しかしお姉さんはその肯定に満足したのだろう。俺に黙礼だけを残して、そそとした所作で部屋を出て行った。

「……」
「……」

ーまあ、その、当然こうなるよな。

沈黙が重い。待っている時も断頭台の前に来ていた気分だったが、ここまで来るとギロチンに頭を乗せられていつ刃が落ちてきてもおかしくないところまで状況は切迫している。事態が動いたのはありがたいが、この空気で二人にして良いとなぜ思ったのか20字以内で述べて欲しい。

「あ、えっと、な、なりゆきでお邪魔してます」

「いいえーじゃなくて、はい！あ、そうじゃなくてですね……」

no、yes、no……？日本語の奥ゆかしさが意思疎通を難関にしている。短いセンテンスの罵倒の言葉が並んでるコミュニケーションが主な自分にとっては、中々に頭を捻る必要があった。

「あー」

「ひゃい！」

「覚えてる？」

「……ひゃい……」

ボツと顔に火が灯ったかのように血色が良くなった玲さんの表情をみて、これ以上フィクションめいた事が起こらなくて良かったような、結論が出るのが怖いような心持ちになって、視線をうろうろと彷徨わせた。玲さんは玲さんで、布団から体を起こしたものの、掛け布団で顔の半分を隠している有り様だ。

「その、そー、そういう、男性から心情的なものを突然ぶつけられるこ

とに、慣れてなくて」

「しんじょうてきなもの」

「まだ心臓がびっくりしてます」

ほすん、と額を布団に埋めた玲さんは「あつい」と一人ごちた後、大きく深呼吸を繰り返した。なるほど、確かに高嶺の花とまで言われる玲さんに直接告白するような勇者は少ないんだろうな。玲さんは心臓のあたりをぎゅうと手で握りしめて、布団に埋めていた顔をゆっくりと起こした。

「……あの、楽郎くん。わたし、楽郎くんと一緒にゲームするのすごく、楽しいんです。お喋りも、一緒にいるのも、デ、デー……が、外出！も、すごく！」

「ありがとう……？」

「上手く言えないのですが、私は……、楽郎くんとこのまま一緒に居たいと思っ……」

「ええっと」

「す、すみません。あの、言葉をまとめるのが下手なのかもしれませんが、すみません。あの、言葉をまとめるのが下手なのかもしれません。だから、つまり」

玲さんの表情は以前として赤いまま、その唇から出る言葉は優しさで好意に満ちている。ーいるが、もしかしてこれ遠回しに振られているのでは？この文脈、お友達でいたいですが、に繋がりがそう……自信がないからそう思うだけだろうか？ばくばくと鳴る心臓がくるしい。そうだ、もしそうだとしても、この後のゲーム内の付き合いは変わらないように……。ー変わらずに楽しく遊べるのだろうか。

「だから、わたしは……！私も、ずっと……楽郎くんのこ……っ！楽郎くん……？」

「あ、え。ええっと……」

情けない顔してたんだろうな、と思わず苦笑いを零した。

パシン、と自分の頬を叩いて気合を入れ直す。変わってしまうなんて事は分かっていたことだ。振られても、それこそ付き合うことになっても。この結論がでる土壇場で不安な気持ちになるのはただ日和っているだけだ。そうだろうか？

「ごめん、気合い入れ直した。どんな結果だろうと、俺は玲さんの返事を聞きたい」

挙動不審なのは、この際許していただいて。しっかりと瞳をみて玲さんを見据える。腹を括る時間は沢山あったんだ。セーブができないからといって、今更逃げ帰るなどできやしない。

目の前の玲さんは赤い顔のまま、眉を下げてちよつとだけ困った様な顔をしていた。視線がうろうろと左右に行ったり来たりを繰り返して、その後視線を逃がすのを諦めたのか、ぱちりと、目があった。――目があつたらバトルの始まり……なんて事はなく、ただ静かにゆっくりと唇を開いた。

「わたし、私は。多分、楽郎くんが思うよりずっと……。ずっと、あなたの方が好き、です」